

聖夜のケーキ Christmas Cake

藤田 雅史

がたがたと車体を揺らして、タクシーは路肩に停まった。

「お客さん、これ以上はちよつと。ここでいいですか」

返事を待たずに運転手は料金メーターを止め、ハザードランプを点滅させる。後続の車が迷惑そうに追い抜いて行くのを見送ってから、俺は財布から抜いた紙幣を運転手に渡した。

先週の雪がまだ残っているところに、今朝からまた雪が降りはじめた。大通りから一本入った道をさらに折れる奥まった路地は膝下あたりまで完全に雪で埋もれていて、いくらスタッドレスを履いているとはいえ、普通のタクシーでは通りの反対側へ抜けるあいだに立ち往生だろう。

大雪で電車が止まっている、と外回りから事務所に戻った営業が教えてくれたので、今夜はタクシーで帰宅することにした。

駅前の乗り場はおそらく長蛇の列だが、事務所から歩いて五分ほどのタクシー会社の配車センターなら、どんなに混んでいるときでもたいていは一台か二台の空きがあるものだ。

特にこんな日は電話をかけて呼び出すより、寒風を我慢してそこまで歩いた方がずつと早い。

幸い、顔見知りの配車係が詰所に見えたので、声をかけて無理矢理一台、融通してもらった。気温が氷点下に届くかという寒空の下で身を震わせ白髪をなびかせていれば、いくら予約だ順番だといつてもこちらが先である。

歳をとってよかったと思うことなどほとんどないが、ずる賢くやれば楽ができることはたくさんある。配車係と目が合ったときにタイミングよく空咳が出たのも効いたかもしれない。

それにしても、今年はまだ師走のうちからずいぶんな積雪量だ。そしてすこぶる寒い。

地球温暖化が言われはじめたのは俺がまだ大学生のときだったと記憶しているが、四十年経つても、この町はちつとも温暖化していない。それどころか肌感覚としては寒冷化している。いや、寒さが身に染みるのは地球の問題ではなく、俺の老化の問題に違いないが。

「道路、滑るから気をつけてくださいよ」

俺よりもいくらか年輩の運転手はそう言つてドアを開けた。冷たい風が車内に吹き込んで、小さな棘が刺さつたように頬がぴりぴりと緊張する。

先週の雪の降りはじめのとき、転倒に気をつけよ、道は用心して歩け、という交通安全標語のようなメールが娘から届いた。

年寄り扱いしやがってばかやろう、なめんじゃねえ、と大人げなく腹を立て、返信せずにいたのだが、それから俺は実際に三回も路上で滑つて転んでいる。

運転手から受け取つた小銭をダウンジャケットのポケットにつっこんでタクシーを降りると、後ろからやって来た軽トラックが横を抜けられずクラクションを鳴らした。

電車は止まり、バスは遅れ、タクシーは俺のようなやつが横入りするから、悪天候の帰宅ラッシュは町全体がなんだか苛々している。今夜は特にそうだ。世の中の多くの人間は、みんなこれから大事な予定があるのだろう。

帰りがけ、事務所の結露した窓のそばで雪景色を眺めながら、

「こりゃ、交通は完全に麻痺だな」

と若い部下に話しかけると、三十代半ばで独身の彼は、

「ざまあみろつて思いますよ」と鼻先で笑つた。

「何だおまえ。道で滑つて転ぶ人間の気持ちにもなってみろ。」

俺なんかそのせいで腰が」

「ちげつすよ。そういう意味じゃなくて。今日、街で待ち合わ

せするやつら、みんな約束に遅れんだろうなと思って思ったんすよ」

二秒ほどぼかんとして、俺はようやく今日が十二月二十四日だということに気づいた。

「お前、まだ彼女できねえのかよ」

「余計なお世話つす。てか部長それセクハラつす」

「セクハラつて、お前、男だろ」

「今度は性差別つすか」

見渡せば、普段は残業が当たり前の若い社員たちが早々に帰り支度をはじめていた。経理の女の子の頬紅はいつもより三割増しで濃い。専務の机の脇にある百貨店の紙袋からは、リボンのかかった赤と緑の包みが覗いていた。

「そういう部長だつて、今年はひとりなんでしょう」

「まあな」

タクシーを見送ってふと視線を上げると、白い綿埃のような雪が間断なく空から舞い落ちていている。このペースで降り続けば、明日の朝は家を出るのもひと苦労だ。始業時間を過ぎても事務所は遅刻や欠勤でがらんとしているに違いない。俺も未消化の有給を使ってしまうおうか。

雪に埋もれた路地を一步踏み出すと、むぐ、むぐ、とブーツが沈みこむ。数歩進んだだけなのに、いつのまにかブーツの隙間から雪が染みこみ、靴下を不快に濡らしはじめた。家までのわずかに五〇メートルほどの距離がずいぶん長く感じられる。

ようやく玄関までたどり着くと、当然のことながら男やもめの家の中は人の気配などなく、ただの暗闇だった。

子どもの頃、クリスマスは親兄弟とずっと一緒だった。十八で実家を出て東京の大学に進学し下宿生活をはじめてからは、同じ屋根の下で暮らす仲間がいた。二十一のときに学生結婚をしたから、それからの四半世紀は妻の久美子とずっと一緒だった。五年前にその妻に先立たれてしまったが、それでもひとり娘の佐織が家にいた。

門前にあかりが灯り、呼び鈴を押せば誰かがドアを開き、玄関を上がれば家のなかには暖房が効いていて、食堂には夕飯が用意され風呂もわいている、そんな当たり前に感じていた暮らしが今となつては懐かしい。

娘の佐織は俺に似て器量がよくないせいか、三十を過ぎててもイブの夜に約束ひとつなく、居間のホットカーペットでごろごろテレビを見ているような物臭な女で、もしかしてこいつは男と付き合つた経験がないのではないかと逆の意味で貞操が心配になるほどだつたが、ようやく今年の春、嫁に行つた（相手は同じ会社勤める二歳年下の優男で、まだ新卒かと思ふほど頼りない風体だが、まあ、悪いやつではない）。

考えてみると、イブの夜をひとりきりで過ごすのは六十年も生きてきてはじめてのことかもしれない。還暦を過ぎるまでクリスマスイブに孤独を感じたことが一度もない人生というのは、やはり幸福な人生だろうか。

俺はコートを脱いで居間のテレビをつけ、チャンネルを夕方のニュースに合わせた。帰りに事務所の隣のコンビニで買った弁当をあたたため、ポットに湯を沸かす。ひとり暮らしをはじめからというもの、皿を洗うのが面倒で夕飯はたいてい外食か、そうでなければ今夜のように買ってきたものでごく簡単に済ませてしまう。レンジがぶーんとうなっている間に食卓に箸と買い置きのカップの即席味噌汁を用意し、風呂をわかすために廊下に出た。

冷えきつた風呂場で浴槽の汚れを流し、再び食卓のある部屋に戻ると、ニュースキャスターの「今夜はクリスマスイブです」という声が耳に入った。振り向くと、テレビの画面には東京の街の映像が映し出されている。

カップルと、家族連れと、イルミネーション。

弁当の中身を黙々と口に運びながら、俺はそれを眺める。

どこかの区の施設のイベントにサンタクロースが登場し、白髭の外人が小さな子どもの頭をなでる。画面がスタジオに切り替わ

り、キャスターの男女がどうでもよいコメントを付け加えて、スポーツニュースに切り替わった。

野球もサッカーも、ウインタースポーツも一切興味がないのでテレビを消すと、家の中は怖いくらいに静かである。

弁当を食べ終え、プラスチックの容器をビニール袋にまとめた途端、やることが何もなくなくなった。

べつにこの歳になって、さびしいだのせつないだのと女々しいことを言うつもりはない。そもそも、イブだろうが何だろうが、普段と変わらぬ一日として、俺はこれまで何度も十二月二十四日を生きてきた。

妻と食事に出かけたり、幼い娘の手を引いて街のイルミネーションを見に行ったり、ツリーの用意や片付けをしたりしたのは、周囲の人間たちが俺にそうさせたからである。

さびしいのではない。孤独は孤独だが、それが不満かといえばそうでもない。でも、なにか物足りない。今夜は何かが不足している。そう感じた。そして、すぐに思い当たった。

どうにも、俺は口さびしいのだ。

煙草や酒のことではない。俺は毎年健康診断で指摘されている通り糖尿病Ⅱ型の予備軍で、甘いものが好物だ。つまり、クリスマスケーキが大好きだ。

これまで、イブの夜は久美子が甘さ控えめの小ぶりのホールケーキを買ってきて、食後に佐織と三人でそれを切り分けて食べるのが習慣だった。

妻が見つけてきたそのケーキは、そこらの店で売っている胸焼けしそうなほどしつこいべつたりとした甘さの生クリームと違って、濃厚なのにさっぱりとした後味の生クリームを使っていてスポンジもふわりと軽く、装飾が控えめな割に粒の大きな苺がクリームの上に贅沢にごろごろとのっついていて、実に俺好みのケーキだった。

久美子が死んでからも、佐織が毎年同じものを買ってきた。

さすがに父娘ふたりで顔をつき合わせてクリスマスを祝うという雰囲気ではなかったが、佐織は切り分けた半分を俺のために冷蔵庫に残しておいてくれた。俺にとってはそれが、イブの夜の唯一の楽しみだった。

思い出すほどに、どうにもあのケーキが食べたくて仕方ない。これはもう食欲というよりも、砂糖中毒の禁断症状である。しかし幸か不幸か、買ってきてくれる人間が今年はもういない。

カーテンの隙間から窓の外を見ると、雪はやんでいた。まだ十九時台と時間も早い。俺は思い立ってダウンジャケットを羽織る。携帯電話と財布と家の鍵だけポケットに入れて玄関の濡れたブーツを履き直した。

店の名前は知らないが、確か駅の近くだったと記憶している。駅の周囲にいくつか洋菓子店があったはずだ。おそらくそのひとつだろう。ケーキの箱のシールやナプキンにプリントされたロゴマークの色と形はなんとなく覚えている。

店が見つかったもイブの当夜とあって品切れが心配だが、確か去年も一昨年も、佐織が買って帰ってきたのは残業上がりの遅い時間だったはずだ。この時間ならまだ店は開いているはずだし、希望的観測に過ぎないがケーキも余っているような気がする。

たとえばもし目当てのケーキがなくとも、カットケーキを買って帰ればよい。そもそも、小ぶりとはいってもホールケーキを丸ごとひとつは、いくら甘党の俺でもどうせ食べきれない。

よし、とりあえず店を探そう。

そんなことを頭の中で考えながら、俺は家を出て駅までの道を歩き出した。

雪に埋もれた路地をやつとのこととで抜けると、交通量の多い県道は、歩道の片側半分が平らに踏み固められていて比較的歩きやすかった。雪は再び降りはじめていたが、近頃のダウンジャケットや化繊でできた下着の性能はたいしたもので、歩いているうちに体温で服の内側に熱がこもり、身体全体があたたかく感じられ

てきた。

駅前の商店街に出ると、さつそく洋菓子店のあかりを見つけた。昔から夫婦でやっている老舗のケーキ屋である。もしやこのケーキか、という期待をもって近づいてみたが、残念なことに店のマークは記憶していたものとは違った。

さらに駅に近づくと、もう一軒、今度はクリスマスケーキを庇の下の売台に出している店があった。アルバイトらしき売り子の女の子がサンタクロースの赤い衣装で寒そうに震えている。

「悪いんだけどこのケーキって、どんなのか見られる?」

売り子は売台の上に置かれたラミネート加工されたチラシの写真と積み上げられた白い箱を交互に指さし、

「こちらはこの生クリームのもので、こちらが生チョココレト、このブッシュドノエルはすみません、もう完売になっちゃったんですよ」と言った。

「いや、これよりひとまわり小さくて、上に大きい苺がごろごろのってるやつってあるかな。このくらいの大きさの」

「あー、すみません、ちょっとわかんないですねー。うちで売ってるサイズはこれだけですな」

「そう、ありがとう」

礼を言っただけで店の前から立ち去りながら、俺はふと、死んだ妻のことを思い出した。

あれは危篤に陥る二日前のことだ。久美子は病院のベッドに横になったまま、チューブにつながれたか細い腕を伸ばし、力の入らぬ指先で俺の手を握りしめた。

おそらく、彼女はそのときが近づいたことを理解していたのだろう。しかし悲痛な感じではなかった。強い女だった。これから旅行に出る人間が家のなかを点検するような、あるいは会社の同僚に仕事を引き継ぐような、そんな落ち着いた表情で、俺の目を見て言った。

「ねえ、今のうちに私に聞いておきたいことある?」

「いや、何もないよ、何言っただよ」

むしろ俺の方が、妻への未練と悲しみで混乱していた。

「聞いておくなら今のうちよ」

「だから、そんなこと言うなよ」

「ねえ、あなた、私がいなくてもちゃんと生きていける？」

「ばか、ずつと一緒だよ」

「佐織がいるから、あの子に任せておけばまあ大丈夫か」

「余計な心配しなくていいよお前は。な、早くよくなるう」

「そうね」

今思えばあるとき、毎年食べているケーキがいったいどここの店のものか、それだけはちゃんと聞いておけばよかった。

商店街の行き止まりは駅の南口である。

改札の正面には駅を中心とした周辺地図があり、俺はそこで立ち止まってしばらくそれを眺めた。記憶が正しければ、南口周辺にはケーキを売っている店はもうなかったはずだ。

雪がまた激しく降ってきたので思わず夜空を見上げると、ふと駅と直結するスーパーの屋上看板が目に入った。スーパーの食品売り場の一角に専門店街があったのを思い出す。

もしかしたら、そこかもしれない。スーパーの中を歩いて確認し、北口に出よう。ああそうだ、確か北口にはケーキも売っている若者向けのカフェがあったはずだ。そののケーキが意外とうまいと、以前久美子と佐織が話していたような気がする。

さっそく俺は駅の連絡通路の途中にある入り口からスーパーに入り、食品売り場を目指した。専門店街といっても、テナントがショーケースを連ねているだけのエリアだが、シュークリームの専門店、ジェラートショップ、和菓子店などと並んで、予想通り、洋菓子屋があった。

ここだ、と思った。しかし近づいてみると、中年の販売員の背後の壁にプリントされた店のロゴマークが、俺の記憶していたものと違う。俺が覚えているのは紺色で、こちらは明るいブルーだ

った。

「すいません、クリスマスケーキって」

「あーごめんなさい、うちは予約分しか作ってないんですよ」

「おたくのこのマークって、ずっと変わってない?」

「マーク? どうかしら。私がここ来てからは変わってないけど。三年は変わってないわね」

「そうですか、いや、どうも」

三軒まわって見つからないと、さすがに少し落ち込んでくる。

そのままスーパーの中を通って駅の北口に出ると、空調の効いた館内と外の温度差に身震いがした。夜の遅い時間になってだいぶ冷え込んできたようだ。化繊の肌着はあたたかいが、指先や首筋から寒さがだんだんと身体に染みこんでくる。

駅前には、ロータリーにあるバス停にもタクシー乗り場にも、案内の定、行列ができていた。皆、身震いしながらスマホを片手にじつと順番を待っている。

スマホか。スマホがあれば、洋菓子店がどこにあるかすぐに調べられるのだろうか。

以前、部下と一緒に取引先の会社を訪ねたとき、帰りがちょうど昼どきだったのでラーメンを食べようということになった。

しかし土地勘のない場所なので、てきとうに営業車を走らせて見つかった店に、と思っていると、隣の部下がスマホにひことと、ラーメン、と声をかけた。するとスマホの画面には、現在地を中心として近隣のラーメン屋が地図上にずらっと表示されたのである。驚きを通り越して俺は感動した。今の世の中、こんな便利になっているのか。

「こんなの別に普通ですよ、部長のケータイだって、ネットでググればかんたんに調べられますよ」

部下はそう言ったが、俺はパソコンもネットも苦手である。だいたいググるって何だ。くぐるのか、もぐるのか。

「部長もいい加減、スマホに買い替えたらどうですか? よかつ

たら俺、一緒にケータイショップついでいきましようか?」

「いやいいよ。俺はメールと電話しかしないし、今使ってるので十分だから」

あのとき、部下に勧められるままスマホに買い替えればよかったかもしれない。ケーキ屋、とつぶやけば瞬時に町の洋菓子店が表示される、あの便利な機能がいまは喉から手が出るほど欲しい。

俺が半ば意地になって使っている、今ではガラケーと呼ばれるらしい古い携帯電話は、久美子がまだ元気だったとき、家電量販店で色違いで買いそろえたものだ。

ずっと買い替えないのは、せっかく揃いにしたのに、俺ばかり新しいスマホにしたのでは久美子に悪いような気がするからでもある。そう思えば、俺は久美子の死をまだ受け止めきれしていないのかもしれない。

北口のカフェはすぐに見つかったが、店に入っても目当てのケーキはなかった。そもそもその店は、カットされた Milf ギュ やチーズケーキをどこかの店から仕入れて、コーヒーを飲む客向けに出しているだけで、本格的なクリスマスケーキの取り扱いはなかった。

ちょうど閉店間際に客はほとんどなく、俺はしかたなくホットコーヒーをテイクアウトして店を出た。

どうしたものかと思案しながら、店の前でコーヒーを喉に流し込む。長く暮らしている町とはいえ、最近はほとんど自宅と駅の往復しかしていないから、だいたいこの地理は把握していても、どこに何の店があるか、断片的なことしか知らない。

紙カップ越しに少しあたたまった指先で、俺は携帯電話を操作し、やけになつて久美子にメールを書いてみた。

〈あれ、どこの店のケーキなんだよ。死ぬ前に教えとけよ〉

ばかげたことだ。自分でも酔狂だと思う。

だいたいこんなことをしなくても、最初から佐織に電話をして

どこにある店か聞けば済む話である。

でもせつかくの夫婦ふたりきりのはじめてのイブを、俺が邪魔しては悪い気がした。それにそんな電話をかけたら、娘夫婦を心配させてしまうだけだろう。実家に取り残された父親がさびしがつている。食いたいケーキにありつけずに悲しんでいる。そんなふうに思われるのだけは避けたい。

そのとき、手のひらで携帯電話が震えた。

びっくりして、思わず飲みかけていたコーヒーを首元にこぼしてしまふ。戸惑いながら見ると、それはメールの着信を知らせるもので、登録のない見知らぬアドレスからだつた。

〈三丁目交差点の「パティスリーアライ」よ。前も言ったじゃない。駅の南口を出て、銀行の角を曲がつた先のところよ〉

なんだこれは。

まるで、死んだ妻から返信が届いたみたいじゃないか。

ディスプレイの明るさに少し目がくらむ。老眼で文字がぼやけたので、まばたきをしてもう一度、少し距離を離してから覗きこむ。すると不思議なことに、そのメールは消えていた。真っ白な、件名も本文もないメールが表示されている。

何かの間違いか。いや、俺は確かに読んだ。

おかしいこともあるもんだ。まさかまぼろしを見ていたのか？

俺は寒さのあまりじっとしていられず、とりあえず駅の南口まで戻つて、三丁目の交差点まで歩いてみることにした。さつきも通つた南口の商店街なら、どうせ家に帰る途中である。

駅の連絡通路の階段を上がるとき、ロータリーの時計を見上げると、家を出てからもう一時間半も経っていた。

コーヒーのおかげで身体が少しあたたまったのも束の間、さつきこぼしたコーヒーの液体が下着の胸元に染みこんで鬱陶しい。ブーツの中は凍りついたように感覚が鈍り、つま先はじんじんと脈を打っている。一歩ずつ足を前に踏み出すたびに、腰にもきしむような鈍い痛みが走り、歩き方が前屈みの窮屈な姿勢になつて

しまう。明らかに老人の身体である。

俺はいつたい、この歳になって何をやっているんだ。

自分のやっていることのばかばかしさに呆れるばかりだ。

そんなにあのケーキが食べたいのか。本当にあのケーキじゃないとだめなのか。

結局、俺はあの家の中でひとりきびしく夜を過ごすのがいやで外に出てきただけじゃないか。ケーキにこだわるのは味覚の問題ではなくて、家族のつながりが絶たれた孤独な現実を直視するのが怖いだけじゃないか。

妻が死んで三大家族がふたりになった。今度は娘が嫁に行つてひとり暮らしになった。それだけのことだ。なのになぜ、俺はこんなにもすべて失つたような気持ちなのだろう。

ひとりになるというのはこういうことか。俺の残りの人生に、クリスマスなんてもう存在しないのかもしれない。

南口に出ると、連絡通路を通つて駅を横断するわずか数分のあいだに、雪が横殴りの吹雪のようになっていた。強風で自分の身体が横滑りしそうになる。

商店街を歩く人影はもうほとんどなく、さつきまで路上に売台を出してケーキを売っていた洋菓子店も、すでにシャッターを半分閉めて店じまいをはじめている。

銀行の角を曲がり、ようやく三丁目の交差点に近づくと、クリーニング屋と学習塾のならびに、本当にその店はあった。

しかし俺の記憶では、ここには確か紅茶専門店があったのではなかったか。

そういえば、紅茶の店がつぶれてケーキ屋ができたと、佐織が大学生のとき妻と話していたような気もする。つい最近のことだと思っていたが、考えてみれば十年以上も前のことだ。

パティスリーアライ。英語の筆記体で書かれた紺色のロゴマークは、俺の記憶にあるものと相違なかった。

幸い店の中はまだ明るかった。ウィンドウ越しにクリスマスツ

リーが見えた。小窓のついた木製のドアを押し、カウベルを鳴らして店に入ると、黒髪で眼鏡をかけた若い売り子の女の子がショーケースの向こうでこちらを振り向いた。

「いらつしゃいませ」

品のいいほえみだった。サンタクロースの衣装ではなく、おそらく普段着であろう白いクルーネックのセーターに、紺色の店のエプロンという彼女のシンプルな格好が、あのケーキの控えめな甘さの印象と重なって、俺は心の底から安堵した。ようやくたどり着いた、と思った。客は他にいなかった。俺は入口のマットの上で肩につもった雪を払い落とし、一歩前が出る。

「すみません、クリスマスケーキ。生クリームの、小ぶりのこのくらいのホールのやつなんだけど」

「申し訳ありません、それが完売となってしまいました」

「ないの？」

「ついさつき、最後のひとつが出ちゃったんです」

「ホールじゃなくても、カットのやつでいいんですけど」

「ごめんなさい、今日はクリスマスケーキだけなんですよ」

確かめるまでもなくショーケースはがらんどろで、その中は白く光しか残されていなかった。

女の子の背後にはケーキの予約を促す自作のポスターが貼られていて、そこにマスキングテープで固定された写真の中のホールケーキは、間違いなく、俺が毎年口に使っているものだった。

「じゃあ、ケーキはもうないの？」

「焼き菓子の詰め合わせでしたら…」

「いや、それならいいんだ」

店を出ると、その場にへなへたと座り込みたくなった。歩き疲れたし、腰も痛い。なにより寒い。そしてそれ以上に、心の中でよどんだ孤独の澱のようなものが、ずっしりと重く胸にこたえた。俺は自分でも不思議なほど落胆してしまった。

しかし、このまま家に帰るのはなんだかしやくだった。

妙な意地だが、俺にはこういうところがある。

手ぶらで帰ればむなししい時間を後悔するだけだ。かといって、いまさらコンビニに寄ってクリームの固まった売れ残りのクリスマスケーキで済ますような情けない真似はしたくない。

もう、酒でも飲みにいっちまうか。

それしか思いつかなかった。そしてそれは名案に思えた。

とりあえず熱爛とおでんかなにかで冷えた身体をあたたためて、スナックのママと朝までカラオケでも歌おう。今夜のことはすべて笑い話にしてしまえばいい。

北口にある馴染みのスナックなら、気心の知れたママがいるし、日本酒もおでんもある。唐揚げもうまい。隣の焼き鳥屋から串焼きを取り寄せることもできる。

午前様だろうと朝帰りだろうと、もうそれを咎める人間など誰もいないのだ。孤独とは自由の異名である。今の俺は孤独であるゆえに自由だ。ならば男らしく自由を謳歌しよう。

それしかないと心に定めて、再び駅に向かう方向へときびすを返したときだった。ポケットの中でまた携帯電話が震えた。

またか。ボタンを押す前に不思議な予感がした。

やはり見知らぬアドレスからのメールだった。

〈みつともない男ねえ。ひとりがさびしくてスナックのママとイブの夜をやり過ぎそうなんて。どうせお店に行ってもね、常連さんばかりで今夜は混んでるわよ。ママさんはあんたの相手なんかしてくれない。余計むなしくなるだけじゃないの。今日はちゃんと帰ったほうがいい。帰りなさい。あなたには帰る場所がちゃんとあるの〉

なんなんださつきから。誰のいたずらだ。

久美子が死んでから、俺のアドレスにメールを送るやつなんて娘くらいしかない。口やかましさは妻にそっくりとはいえ、その娘だつてイブの夜にまさかこんないたずらはしないだろう。

機械のことは俺にはよくわからないが、もしかしてハッカーと

かいうやつのは仕事か？ まさかとは思いますが俺はサイバーテロに巻き込まれているのか？ そんな非現実的なことを考えていると、同時にこれが本当に妻からのメールなのではないかという気もしてくる。むしろそっちの方が現実的に思えてくるから不思議だ。もし本当に天国の妻からのメールだったとしたら…。

「ったく、うるせえやつだな。大の男がどこで何をしようが勝手だろうが、ばかやろう」

俺は携帯を乱暴にポケットにつっこみ、ぶつぶつと独り言を呟きながら来た道を引き返した。

商店街の銀行の角まで戻って、その場に立ち止まる。

左には駅の先にスナックがある。右に行けば真つ暗な自宅だ。

雪は静かに、しんしんと降っている。深呼吸するように大きくひとつ息を吸い込むと、あまりの空気の冷たさに、身体から体温が失われていくのがわかった。

それから十分歩いてようやくたどり着いたのは、会社帰りにタクシーを降りた場所だった。

家の前の路地に積もった雪はさらにかさを増している。

ふと見ると、そこには家を出るときにつけた足あととは別に、新しい足あとが二組、路地の奥まで続いていた。

近所の住人が帰宅したときのものだろうと特に気にとめず、自分の足あとを踏みながら家に近づくと、その新しい足あとがちょうど俺の家の前で途切れているのがわかった。妙である。

一旦立ち止まり、目をこらす。すると雪の降りしきる暗闇に、不審なふたつの人影が見えた。家の門扉の陰で、こちらに背を向けるような格好で突っ立っている。

来客の予定などない。近所の誰かが町内会費の集金にでも来たか。しかしいくらなんでもこんな大雪の夜遅くに来ることはないだろう。そうでなければ、新聞の集金。あるいは聖書の教えを冊子にして配って歩いているどこかの宗教の信者が聖なる夜とあつ

て勧誘にでも来たか。それ以外で考えられるのは、空き巣や強盗くらいしかない。あるいは放火魔か変質者か。

いったい誰だ。ぶるつと寒気が走って身体が強ばった。

引き返して交番に、と思うが、でももうこれ以上歩くのは体力的に限界だった。それに人影は犯罪者とは限らない。近所の住人との変なトラブルは避けたい。

そんなことを頭の中で考えながら、いざというときすぐ一一〇番できるよう、俺はポケットの中の携帯電話を握りしめた。

恐る恐る警戒しながら近づくと、ふたつある人影のうち、小さな方の影が俺に気づいてバツとこちらを向き、腕を振り上げた。

ひっ。恐怖のあまり、全身に鳥肌がたつ。

「お父さん、遅い！寒すぎ！」

「…」

身体から力が抜けた。佐織と、その夫だった。

「ちよつともう、どこほつつき歩いてんの」

「お前たち、こんなところで何やってんだ」

「ひどーい、せつかく来たのに」

「こんばんわ。遅くにすみません」

「ああ、どうも」

「これ一緒に食べようと思ってさ。売り切れ寸前だったよ」

佐織がスマホのライトで手元を照らした。あたたかそうな毛糸の手袋の先に、底の広いビニールの袋をぶらさげている。

確かめるかでもなかった。その中にあるのは、いつものクリスマスケーキに違いなかった。袋の外側には筆記体で、Patisserie Araiとプリントされている。

最後のひとつ、買ったのはお前たちだったのか。

「お父さん、メリークリスマス」

俺はふたりの前に突っ立って、何を言っているかわからなくなっていた。

「てか早く開けてよ。寒い。風邪ひく」

「おう、ちょっと待て。いま、鍵……」

俺はそれ以上言葉をつなげない。鍵を持つ指先が震えているのは、寒さのせいだけではなかった。

深呼吸をして、冬の空気を胸に吸い込む。でももう体温が失われるような感じはしない。そのかわり、年甲斐もなく胸にこみ上げるものがある。

「まあ入れ。寒かったろ」

「だからさつきから寒いって言ってるんじゃない」

「晋吾くんも、ほら、入って入って」

「お邪魔します」

ふたりを家のなかに促しながら、俺は腕を伸ばして玄関の内側のドアの横にあるスイッチをぱちと押す。平凡で何の変哲もない、ありふれた幸福のような昼白色が、まばたきをしながら夜を照らした。

「来るなら電話しろ」

「僕もそう言ったんですけど」

「だって驚かせたほうがクリスマスっぽいし、その方がお父さん喜ぶかなーと思ってる。ただいまー。あーこの家、全然変わんないね」

「当たり前だ」

「でもお父さんのニオイが前より強烈になってる」

「何言ってるんだ」

娘が笑う。娘の夫がづられて笑う。俺も、笑っている。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。